

V-92 アスファルト系舗装の防草性に関する基礎研究

鹿島道路技術研究所 正会員 遠藤 嘉

○ 小池 俊雄

I. 誌言 アスファルト系舗装道路のうちでも特に交通量の多い路肩附近や、干拓埋砂の斜面舗装などは地下茎植物が舗装を突き破って発芽するため、舗装に無数の亀裂を生じ、これが舗装破壊の原因となる。草生防除としては一般に殺草剤撒布が行なわれているが、市販薬剤の多くは一面の撒布で地下茎植物を完全に枯死し得ない。これは千葉大学及び農林省土木試験所の実験によつても明らかである。逆に舗装体の物理的強度によって防草性を得なければならぬことになる。その基礎研究として植物の発芽成長による舗装破壊機構を明らかにしたもののが小論である。

II. 突き抜け試験 植物の繁殖は種子または地下茎によるが、本実験はまず種子から発芽して舗装体を突き抜ける雑草の調査をし、そのうちから最も突き抜け力の大きい雑草に対して種々の実験を行なつた。(第一次、第二次実験は教育大学に委託)

(1) 第一次実験 東京都多摩川堤防に繁殖する雑草のうちから8種を選んで試験用地に播種(表-1)し示すアスファルト混合物のブロックを敷き並べて工から押え、縦目をサンドマスケットで接着した。突き抜け実験結果は、表-2に示す如く、マメ科、ツニクサ科および地下茎のないキク科は厚さ5cm以上の供試体を突き抜けないが、地下茎のあるイネ科およびトウサ科は突き抜け力が大きく、厚さ5cmの供試体を完全に突き抜けている。

(2) 第二次実験 突き抜け力が大きいアシを千葉県五井海岸から採取し $\frac{1}{2000}$ のWagner potに移植し、その上に筋柱式アスコン、サンドマスケット、サンドアスファルト、アスベトン、およびカルビアシムの各供試体を載せ、突き抜け実験を行なつた結果を表-3に示すが、カルビアシム、アスベトンは突き抜けない。

(3) 突き抜け作用による舗装体の挙動 植物の突き抜け作用を受けた舗装体の挙動を明らかにするため、アスファルト供試体内部に白線を設け、オギ(イネ科)の突き抜け過程を観察し、舗装体表面、内部の様態を調査した。

(4) 供試体表面の挙動 供試体表面の動きは図-1に示す如く表面の盛上がりは始め急速に進み、表面に亀裂が発生してからは緩慢になる。

(5) 供試体内部の挙動 突き抜け実験中表面の動きが停止した供試体を芽の発芽部で2つに折り、供試体内にある芽の状態を観察するとともに、その両端を並べて白線の動きの跡を観察した。この供試体は、表面が動き始めてから5日後より停止したものである。観察の結果、オギは供試体との密着部凹凸を作ったままで枯死していることを認めた。この枯死の原因是、低気温が2日続いたためアスマルの低温

表-1 ウントマスチック混合比			
TYPE	砂	石粉	アスファルト
A	60.4%	21.0%	18.6%
B	54.5%	24.6%	21.5%

表-2 舗装層と各種植物の突き抜け実験結果表									
供試体	レンド	ワント	マスチック	アスコン	アスベ	アスバ	トウサ	マスケ	ソイツ
1	A	B	A	B	A	B	A	B	A
2	2	4	6	3	4	0	3	2	4
3	1	1	2	7	2	2	3	2	1
4	0	1	1	3	0	2	0	1	0
5	0	0	0	0	0	0	0	3	3
無舗装	全面的に発芽							3	3
	5.5							3.5	5.5

(注) 表中の各数字は突き抜けした芽の数である。(1種植物の播種量のものは95%発芽した。アシの芽には50%は100%完全に抜けている。)

表-3 各種舗装体の突き抜け実験結果表

発芽時期	発芽5日以後	表面部発芽	突き抜け完了	記事
サンドマスチック	やや凸	更に凸み出す	前照灯2日後 頂高1.7cm	枯死(土中ガラガラを 形成する性質あり)
サンドマスチック	やや凸	更に凸み出す	前照灯3日後 頂高1.7cm	判定(突き抜け)
筋柱式アスコン	側面凹凸	側面凹凸	—	(側面凹凸の有無)
アスベトン	変化なし	変化なし	変化なし	供試体下を活死地 (要注視なし)
カルビアシム	変化なし	変化なし	変化なし	供試体下を枯死地 (要注視なし)

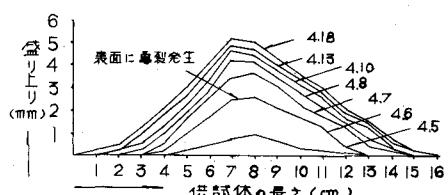


図-1 供試体表面の盛り上り状況

図-1は供試体表面の盛り上り状況を示すグラフである。Y軸は盛り上り(盛り上り)、X軸は供試体長さ(cm)である。複数の曲線が示され、曲線の最高点が時間とともに変化している。曲線の最高点が「表面に亀裂発生」と記されている。

硬化がオオの成長を妨げたものと思われる。図-2に供試体内部挙動(白線の動き)を示す。

(c) 気温と供試体温度 供試体挙動観察と並行して気温と供試体温度を測定し、結果を表-4に示す。気温20℃以上の場合には晴(日照)であり、20℃以下の場合は曇天である。植物の成長は気温が20℃以上の場合に限って伸長し、20℃以下になると伸長の停止が認められたため突き抜け所要時間は気温20℃以上までは供試体表面温度30℃以上の累計時間であると考えられる。このことから突き抜け実験中に於ける供試体表面温度30℃以上の累計時間は約108時間程度であると考えられる。

(d) 突き抜け力の測定 植物が土中から発芽する場合、芽の先端に触れる障害物を押上げて発芽する。この押上げ力は植物の細胞膨張によるもので、一般に $T(\text{膨張}) = S(\text{吸水力}) - C(\text{浸透圧})$ の関係がある。しかし大きさの測定は、繊維であるため芽の先端に荷重受器を取り付け、芽が伸長を続ける間に受器に荷重を増加させ、成長が停滞するまでこれを続ける方法で押上げ力を測定した。この結果を図-3に示す。これから植物の成長が停滞する荷重、すなわち押上げ力 $P = 126\text{ g}$ である。

(e) 考察 以上の各実験結果から植物がアスファルト系舗装を突き抜ける挙動について次の如く考える。混合物の底面に接した植物は126gの押上げ力が働く。一方押上げ作用を受けたアスファルト舗装体は太陽の輻射熱で25~35℃に温められ、合材自体の粘着力が低下し、植物の芽が押上げ作用を受けている底面を局部的に圧縮して凹む。更に植物の伸長が進むと凹みもこれに伴って大きくなり、或る段階以上になると舗装表面に盛り上がりが生ずる。この盛上がり益々大きくなるとアスファルト舗装の変形・抵抗力の均衡が破れ、亀裂が発生する。このようにして植物は漸次下方へと伸長するが、舗装体の亀裂に達するとその裂け目を通って大気中に抜き、更に横方向に細胞が成長し、アスマルを圧縮しながら茎を大きくする。突き破られたアスマルは自重で漸次下方に沈下し、地表面の形、すなわち発芽前の形に戻る。そのため最終状態は恰も punching によって突き抜けた如く見える。これが突き抜け挙動である。

Ⅲ. 人工植物実験 対草性実験は発芽時期によって制約を受けるため四季を通じて実験を得るとともに、突き抜け力を定量的に測定し得る方法として突き抜け機械を考察し、これを人工植物とした。

(f) 人工植物 装置の概要は図-4に示す通りであって、貫入棒が一定の押上げ力で供試体に貫入するもので、試験温度を一定に保つことができる。また突き抜け量を自動的に記録し得るよう装備してある。貫入棒は図-5に示す如く、光端以外の周面上に附着力が働くかのように、すなわち $C=0$ となるように配慮した。これを植物実験からみて成長植物の周面は定位位置に固定し、成長芽附近のみが伸長して光端に大半の抵抗力がかかることを認めたのである。

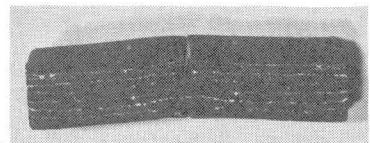


図-2 白線による供試体内部挙動

表-4 気温 供試体温度測定法

月日	4/5	4/12	4/21
気温	21℃	11℃	25℃
供試体表面温度	30.9℃	11℃	36℃
供試体接地面温度	21℃	11℃	25℃

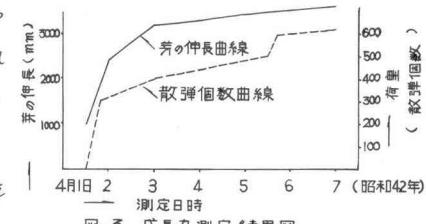


図-3 成長力測定結果図



図-4 人工植物の説明図

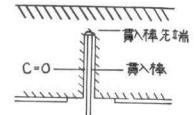


図-5 褐入棒の縦断面

(2) 実き抜け実験 実際の植物が実き抜け現象が生ずるアスファルト舗装体温度は25~30°Cであるから、実き抜け実験は25, 30, 40°Cの各温度について実施し、実き抜けに要する最大荷重と実き抜け所要時間を測定して結果を表-5に示す。

(3) 考察 植物の実き抜け機構を工学的に類似させた人工植物の実き抜け実験結果と植物実験結果との対比を表-6に示す。供試体温度25, 30, 40°Cにおける人工植物の実験結果と植物実験結果とは殆んど同一の数値を示すものであり、人工植物によって得られた実き抜け力は、植物の実き抜け力であると考え得る。よってアスファルト舗装を実き抜ける力は約4.7 kg/cm²~9.0 kg/cm²である。

IV. 理論的解析 植物が実き抜ける力を Meyerhof の塑性平衡の理論より検討する。なお述語、記号は土質工学ハンドブック10.5, 10.7の通りである。

(1) 計算上の仮定

(a) 自重に対する仮定 植物の結果によれば、茎の周面にアスファルトが附着していないので、 $C = 0$ ----- (1)

茎の継断切開の観察より、植物先端は柔軟な毛筆状のもので、実き抜けに関与する实体と考えられないので、茎の尖端は計算上に関する限り直徑2Rの水平円形断面と仮定する。ただしこの断面は粗いものとする。

(b) 混合物の自立高 混合物の温度が30°Cで、単位体積重量 $\gamma = 0.002 \text{ kg/cm}^3$ の場合における粘着力は、測定の結果 $C = 0.997 \text{ kg/cm}^2$ であるため、自立高さ $\gamma R \approx 18 \text{ cm}$ である。従って舗装厚エビ18cm程度までは自立性があり、静止土圧が作用しないと考える。 $\therefore P_0 = 0$ ----- (2)

また、この高さまでは茎の上部に重さはかかるない。

(c) 仮定 (a), (b)のことから $\gamma = 0$ ----- (3)

従って $P_0 = S_0 = m = 0$ ----- (4)

(2) 带状基礎の支持力(端部粗)

仮定の結果 $\cos(2\eta + \phi) = 0$, $\eta = \frac{\pi}{4} - \frac{\phi}{2}$, $\therefore \lambda = \frac{\pi}{2} + \phi$ ----- (5)

従って $N_c = \cot \phi \left[\frac{(1 + \sin \phi) \exp[(\pi + 2\phi) \tan \frac{1}{2}]}{1 - \sin \phi} - 1 \right]$ ----- (6)

仮定によりQの第2項および第3項が0となるので、 $Q = g \cdot 2R$, $\beta = C N_c$ ----- (7)

また常に $N_c = N_c \cdot g$ ----- (8)

(3) Hoop Stressに関する支持力部分 Hoop Stressに関する支持力部分の計算には便宜上 $\phi=0$ と仮定する。この支持力部分をHとすれば、 $H = \frac{2}{R^2} \int_0^R \Delta P \cdot r dr$ ----- (9)

$$\Delta P = \log_e \frac{1 + \frac{a \cos \theta}{\sqrt{1-a^2}}}{1 - \frac{a \cos \theta}{\sqrt{1-a^2}}} + \cot(\eta - \phi) \log_e \frac{1 + \frac{a \cos \theta}{\sqrt{1-a^2}}}{1 + a \cos(\eta - \phi)} + \frac{3}{4} \pi + \beta - \eta - \frac{2}{\sqrt{1-a^2}} \left[\tan^{-1} \left\{ \frac{\sqrt{1-a^2}}{\sqrt{1-a^2}} \cot \left(\frac{\eta - \phi}{2} \right) \right\} - \tan^{-1} \left\{ \frac{\sqrt{1-a^2}}{\sqrt{1-a^2}} (\sqrt{1-a^2} - 1) \right\} \right] \\ (a < 1) ----- (10)$$

表-5 人工植物による実き抜け最小荷重と所要時間表

供試体 測定	實入植の先端直徑 = 5.05 mm		實入植の先端直徑 = 5.1 mm	
	実き抜け前重 実き抜け強度	所要時間	実き抜け荷重 実き抜け強度	所要時間
40°C	188 g	26 %	5 時間	—
30°C	681 g	93 %	120 時間	969 g 47 %
25°C	670 g	9.4 %	144 時間	979 g 48 %

(注) 供試体厚さ4cm, 密度20 g/cm³

表-6 植物と人工植物の実験結果の比較表

供試体 温度	植 物		人 工 植 物	
	25°C~40°C	30°C	30°C	40°C
実き抜け所要時間	101 分	144 分	120 分	5 分
実き抜け速度	0.4~0.5 kg/s	0.3 kg/s	0.3 kg/s	1.7 kg/s
実き抜け力	(126 g)	—	—	—
先端以外の附着	0	0	0	0
供試体表面の盛り上り	両者同じ型状であり表面彫刻状況も同じ			
実き抜け後の状況	両者同じ型状を示す。			

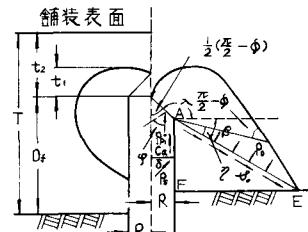


図-6 粗筋底面の場合実き抜け係数決定の説明図

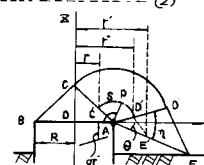


図-7 Hoop Stressの説明図

$a > 1$ においては (4) 式の最後の項が次のようになる。

$$-\frac{2}{\sqrt{a-1}} [\operatorname{coth}^{-1}\left\{\frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{a-1}} \cot\left(\frac{\pi-\beta}{2}\right)\right\} - \operatorname{coth}^{-1}\left\{\frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{a-1}} (\sqrt{a}-1)\right\}] \quad (11)$$

(4) 支持力 支持力度を g_R (kg/cm^2) とすれば、(7), (8) 式より

$$g_R = c(Nc + H) \quad (12) \quad \text{ここで } c : \text{混合物の粘着力}$$

$$\text{支持力 } Q \text{ は } Q = g_R \cdot \pi R^2 \quad (13) \quad \text{ここで } Q : \text{支持力} = \text{混合物の抵抗力}$$

(5) 支持力度の求め方

根入れ深さ (植物の場合には貫入高) D_f に対して $\frac{D_f}{2R} \sim \phi \sim \beta$ の図表より β を求め、 $m=0$ として $\rho - \phi \sim Nc$ の図表より Nc を求め $\frac{D_f}{2R} (= \frac{D_f}{B}) \sim Nc$ (= Nc) の図表より

$$H = (\text{円形基礎の } Nc) - (\text{帯状基礎の } Nc) \quad (14)$$

(6) 突き抜けせん断の必要厚さ

(1) 端面工の必要厚 基礎底面 (植物の端面) とすべり面最高部間の垂直高さは、対数らせんの性質より (5) 式で表わされる。 $t_1 = R \sec\left(\frac{\pi}{4} + \frac{\beta}{2}\right) \sin\left(\frac{\pi}{2} - \phi\right) \exp\left(\frac{\pi}{4} + \frac{\beta}{2}\right) \tan\phi \quad (15)$

植物先端工の押しづき剪断より $t_2 = c \cdot 2\pi R \quad (16)$

大と小の何れか大ほう方を大とし、大を植物端面上の必要厚さとする。

(6) 支持力の必要厚さ (5) の方法により $D_f \sim Q$ 曲線と $D_f \sim H$ 曲線を作り、その交点から植物の突き抜け力 P を得る。

(7) 合計厚さ (必要厚さ)

$$T = D_f + t \quad (17)$$

(7) 実験との比較 理論より誘導した $Q = g_R \cdot \pi R^2$ の式に三軸試験結果から得た c (粘着力) と ϕ (内部摩擦角) を代入して算出した突き抜け力と、人工植物より実測した突き抜け力とは若干の違いが生ずる。試しに $\phi = 0$ とした場合の突き抜け力は実測値と殆ど一致するため、或いはこの方法で“求めることが正しいのか”も知れない。これについては種々検討しなければならない。

V. おわりに

アスファルト舗装の突き抜け力について植物実験から人工植物実験および理論的解析を進めてきた。さきに述べた如く実測値と理論値とに若干の違いが生じた。この理由については次のように考えられる。

- 植物の突き抜け速度が 0.5 mm/s と大変ゆっくりしている。
- アスファルト舗装が突き抜けを許す温度は粘弹性領域である。
- 突き抜けはアスファルト混合物の骨材粒径に直関係である。

従って突き抜け力の理論的解析には Rheological な展開によって進めることが正しいように思われるが、更にこの方向について検討を進めていきたいと思う次第である。

最後に本研究の第 1 次、第 2 次実験に対しては東京教育大学農学部教授 松田俊正博士、黒石敬教官に、また植物細胞等に関しては東京農工大学教授 田崎忠良博士、牛島忠広教官の御指導を賜りました。ここに心から感謝の意を表します。